



2024

龍谷大学学生気候会議 提言書



主催：龍谷大学学生気候会議実行委員会

共催：龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター(LORC)
サステナビリティ推進室

運営協力：龍谷大学学生気候会議OCS

目次

1 提言の背景と目的.....	3
2. 提言	4
2-1 学生からの提言 分野別での提案 学生団体学生気候会議OCsによる意見	
2-2 「学生気候会議 意見集約」からの提言	
3 参加学生の状況と学びについて	8
4 総括	10
5 資料編... ..	11
5-1 プログラム概要	
5-2 運営体制	
5-3 ファシリテーション・グラフィック成果物	
5-4 メディア掲載一覧	
5-5 「学生気候会議 意見集約」と回答結果	

1. 本提言書の背景と目的

気候変動対策と脱炭素化は、もはや特定の国や地域にとどまらず、人類共通の喫緊の課題となっている。しかし、国際社会に目を向けると、経済や安全保障上の優先事項に押され、世界をリードする大国でさえも気候変動対策に後ろ向きであったり、十分なリーダーシップを発揮できていない現状がある。さらに、世界各地で続発する紛争や社会不安が、国際社会の団結した気候変動への取り組みを一層難しくしている。

しかし、だからこそ今、改めて気候変動対策を「世界共通の喫緊の課題」として認識し、持続可能な社会の実現に向けて行動を起こす必要がある。本学は、創立400周年に合わせて、2039年までのゼロカーボン・ユニバーシティの実現を宣言し、京都市の脱炭素先行地域の取り組みにおいて伏見エリアの主要アクターの一つとして参画するなど、地域の脱炭素化に向けて積極的な取り組みを展開している。

龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター（LORC）と学生団体OCs（オックス）、そして本学のサステナビリティ推進室は、2024年12月に第4回龍谷大学学生気候会議を開催した。取り組みの参考とした「気候会議（climate assemblies）」は、気候変動に対する政策・事業の開発や実施の意思決定プロセスに市民の意思を反映させるためのツールであり、欧州諸国を中心に国・自治体レベルで実施されてきた。近年では日本においても取り組みが徐々に広がっているが、大学全体として学生による気候会議を実施したのは、本学が全国初となる。回を追うごとに開催の目的は少しずつ変化しているが、4回目となる今回は、気候会議の本質である「気候ガバナンスへの市民（ここでは学生）の意思の表明と政策への関与」に立ち返り、「ゼロカーボンユニバーシティ」宣言を行っている龍谷大学の脱炭素化への取り組みを、学生目線から評価・検討する」とした。また、新たな試みとして、これまでの深草キャンパスのみの開催から、龍谷の森を有する瀬田キャンパスと深草キャンパスでの開催とすることで、より大学全体の取り組みについて検討を行うことを可能にした。

第2回以降の学生気候会議では、議論の内容を提言書としてまとめ、学長に提出してきた。この提言書は、学生気候会議において参加学生が議論し、提言として導出した内容を中心に、OCsの学生も含めた運営委員会が編集したものである。提言のソースは、気候会議における次の4つのアウトプットである。

1. 気候会議における参加学生のグループワークによる提言
2. 気候会議終了後の参加学生個人への意見集約（気候変動対策に関する17の質問）の分析結果
3. 参加学生への気候会議前後のアンケートの分析結果
4. 気候会議で講師を務めた2名の専門家と運営委員会からの提言

これまでの提言のうち、キャンパス内で使用する電力の再エネ100%化の実現、龍谷ソーラーパークの増設、ウォーターサーバーの設置、学部横断の「仏教SDGs」を学ぶ講義の設定、学生気候会議の定例化など、一部はすでに実現に至っている。特に、サステナビリティ推進室の設置と推進室による学生気候会議の事務局運営は、大学としての学生気候会議へのスタンスが年々ポジティブに変化していることをうかがわせる。気候変動対策の推進において、大学は単なる教育機関にとどまらず、地域社会の脱炭素化を先導する役割を果たすべき存在であり、この学生気候会議がこうした役割を担う上で重要な役割を果たしてきたことを喜ばしく思っている。そして、今後も学生と大学が一体となり、龍谷大学およびその周辺地域の気候変動対策を主導していくことを強く期待している。

第4回龍谷大学学生気候会議運営委員会一同



2 提言

2-1 学生からの提言

今年度の気候会議では、1日目に『龍谷の森』の活用をテーマに、地域との連携も視野に入れた活用のアイデアを考えるため、カードゲームや講義、フィールドワークを通じて、気候変動や森林保全に対する理解を深め、地域と連携した活用アイデアについて議論を行った。2日目には「深草キャンパスの新棟建設」「深草の森づくりにおける脱炭素化」「居心地の良い空間づくり」というテーマでグループワークを行なった。

龍谷の森の利活用に対する具体的な活動の提案

1日目のグループワークでは、龍谷の森を利活用するための具体的なプロジェクトについて議論を行った。

1班は「ドラゴン・フォレスト・ツアー計画」と題した、龍谷の森を活用し森林の多様性を学びながら環境意識を高めることを目的とする企画を提案した。専門家の案内による森の散策や、地域木材を使ったクラフト体験、キャンプファイヤーでの意見交換を通じて、体験的な学びと交流を深めることにより、森林資源や環境保全への理解が促進され、学生と地域住民のつながりも強化される。定期開催を視野に入れて行くと良いのではないかと考える。

2班は森林資源の活用を通じて、環境に配慮した快適な空間づくりと脱炭素への理解促進を目的とする「木材を利用したワークショップ」を提案した。森林への関心を高めるワークショップを起点に、地域と連携して木材を雑貨やベンチ、住宅建築に活用することで、その価値を広げていく。森の中にアスレチックを設置することで、自然と共に学び遊ぶ場を創出し、地域・学生・大学関係者の交流を促進する。これらの取り組みを通じて森林管理の担い手を育成し、持続可能な地域づくりにつなげることを目指したい。

3班は龍谷の森をフィールドに、環境への関心を高めながら、持続可能な社会や脱炭素の実現を目指す企画「龍谷の森3大チャレンジ～森を活かし、学び、未来へつなぐ～」を提案した。間伐材を活用した木工品づくりや、きのこ栽培、小中高生向けのワークショップなどを通じて、森の資源を循環させながら地域と連携した実践的な活動を行う。森にはハンモックやベンチ、アスレチックなども整備し、自然とふれあえる場を創出することで、学生や地域の人々が気軽に森と関われる環境を整える。こうした取り組みを通じて、環境教育・地域交流・森林活用のモデルを築き、森を未来につなげていくことを目指したい。

4班は「龍谷の森をみんなの社交場に～トレイルランニングを通じた森林活用～」と題し、龍谷の森を、トレイルランニングを楽しめる“社交の場”として活用するなどことを提案した。整備されたランニングコースにより、学生や地域住民が安全かつ快適に運動できる環境を提供すると同時に、適切な間伐や倒木・落ち葉の再利用などを通じて、森林の健全な管理と環境保全を両立させたい。また、清掃参加型の仕組みや、樹木のオーナー制度を導入することで、利用者が森に関わりながら、CO2吸収などの効果を実感できる環境づくりを進める。加えて、フォトコンテス

トやワークショップ、環境教育プログラムの実施により、幅広い世代の参加と交流を促進する。これらの取り組みを通じて、龍谷の森の魅力を広く発信し、最終的には他大学や企業との連携を図り、全国的な森林活用モデルへと発展させることを目指したい。

5班は龍谷の森を学生や地域住民が自然と触れ合い、リラックスできる空間にする「龍谷の森チル」を提案した。この取り組みにより、学業の合間の息抜きの場ができ、資源の循環利用が進むとともに、大学のブランド価値が向上する。また、龍谷の森を「学び」「癒し」「地域とのつながり」の拠点として、全国的に注目される環境教育と地域活性化のモデルとして成長させることを目指したい。

6班は「CO2削減と再利用による持続可能な環境づくり」を提案した。CO2排出を抑え、吸収・再利用を促進し、環境負荷を軽減することが目的だ。大学内でDAC機械を導入し、空気中のCO2を回収して活用する。企業と連携してコスト負担を軽減する。CO2吸収策として、サボテンやグリーンカーテンの導入を進める。地中貯留やCO2吸収塗料

(DACコート)も活用する。排出抑制策として、オール電化や太陽光パネルの増設を行う。授業で出た紙やプラスチックごみは固形燃料(RPF)として再利用する。これにより、CO2濃度が低減し、ゴミ削減とエネルギー再利用が進む。クリーンエネルギーの利用が拡大し、企業との連携でコストが軽減される。大学の取り組みは他の施設や地域にも良い影響を与える。最終的に、CO2を吸収するキャンパスを実現させたい。



分野別での提案

エネルギーの分野では、「エネルギー問題を知るという視点」から、環境科目の必修化、先端理工学部が発電に関する領域を作り啓蒙活動、見えるところに豆知識を貼ることなどに取り組むことなどを提案した。

建築の分野では、建物の不自由さに焦点をあて、便利な建物を作りつつ持続可能性にも焦点を当てた。例えば、夏のエアコンが効きすぎて寒いという学生が多いことから、AIによる温度管理を取り入れることや、コンセントをより多く設置し、学内で充電すると再エネに貢献するというシステムにすることは一つ有意義ではないだろうか。

通勤通学においても、取り組みを広げていくべきである。議論では、EV化推進とポイント制をキーワードに取り組みを考えた。例えば、公共交通定期代への支援を行うこと、また自転車通学や徒歩通学にミールポイントを付与するなど、インセンティブを生む活動は効果的ではないだろうか。また、人の移動による二酸化炭素を抑制するためにオンラインデーをつくり、さらには大学を立ち入り禁止にすることも、ひとつの手段となるだろう。

大学は教育機関として大きな役割を担う。しかし、一部の学部では環境に関する講義や紹介がされているものの、十分とは言えない。授業ではさらに環境問題について取り上げ、学部学年問わず気候変動問題に関する認知度を高めていくことが必要ではないだろうか。そのためには、1回生で環境を学べる講義必修化、環境映画鑑賞、脱炭素カードゲームでアイスブレイクなどを授業で取り入れていくことを提案した。

また、資源削減の観点から出席カード、コメントカードの廃止や、さらには、ポータルサイトを活用した食堂の売れ残り品目の見える化など、授業内だけでなく学生生活一般においても、知見を広めていく努力ができるのではないだろうか。

龍谷大学は伏見区地域の一員として地域に貢献する役割も担う。気候変動について学び知識を身に着けた学生主導の授業の開講や、西浦町でのエネルギー講座などを行うことで、龍谷大学が脱炭素先行大学として地域を巻き込んでゆくことができる。さらに、地域の祭りと協力して持続可能なコミュニティを作ってゆくことや、地域のイベントで人力発電の体験コーナーを作るなど、取り組みを市民が体感できる機会を設けることも、大学として地域に貢献する手段の一つとなるだろう。

学生団体学生気候会議OCsによる意見

学生気候会議OCsは第2回学生気候会議から学生メンバーとして運営の一端を担ってきた。我々は自分たちの学ぶ学舎の環境を整えるだけでなく、地域社会に貢献することができる社会の一員としての大学を目指して呼びかけを行ってきた。龍谷大学学生気候会議は大学から多くのサポートを受け成り立っている一方で、学生が大学のガバナンスの一部として認識され、主体的に意見を述べるができるこの機会は貴重である。

今回、過去の気候会議における提言の進捗評価が行われたことは、とても意義のあることであった。我々OCsのメンバーはファシリテーターを担当しながら参加者の声を聞いていたが、全キャンパスの電力が再生可能エネルギーを源にしていることやウォーターサーバー設置など成果の上がっているものに関して、驚きや賞賛の声が数多く上がっていた。また、実施段階もしくは未実施の提言が多いことも事実であるが、あらためて参加者が課題を認識し、改革の機運醸成につながっていると感じた。

また、学部や学年を超えたコミュニケーションの重要性を再認識した。龍谷大学の一員として大学をよくしたいという共通の想いのもと、多様な意見を尊重しながら行われる議論からは、学生ならではのユニークな意見が飛び交った。また、瀬田キャンパスでの学生気候会議実施と新棟建設に関する話題提供もキャンパスの壁を越えて新たな気づきを生み出した。コミュニケーション機会の希薄化が指摘される時代において、対面で多様な人々と関わる機会を設けることはとても意義があるのではないだろうか。今後も多様な主体によるコミュニケーションを意識した学生気候会議の実施を継続していきたい。

これらを踏まえ、我々学生気候会議OCsは次の内容について提案したい。

1. 大学は学生から提案された内容を精査し、実施計画のもと実施する。実施が難しいものについては学生への説明し実施進捗評価の際に参考にする。これら透明性の確保により、学生気候会議の次回参加者が信頼をもって提言をすることができる。
2. 大学の脱炭素目標である2039年にむけ、学生を気候ガバナンスの一員として位置づけ学生気候会議を継続する。コミュニケーションの重要性を再認識し、学部や学年、キャンパスを超えた議論の機会として学生気候会議を継続する。また、2039年におけるカーボンニュートラルを目指すのではなく可能な限り早急に達成し、ゼロカーボンユニバーシティの先駆的存在となる。

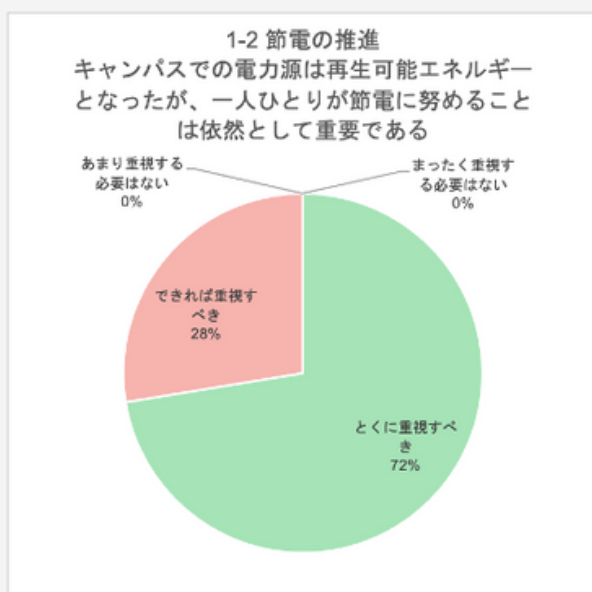
2024年度気候会議はただ過去のイベントを継続しただけではない。過去の気候会議にはない要素を加え、着実にゼロカーボンキャンパスへの道を作る要素の一つとなっている。今後も学生運営メンバーとして学生気候会議OCsは大学の一員として脱炭素社会達成のために歩みをともにする。

2-2 「学生気候会議 意見集約」からの提言

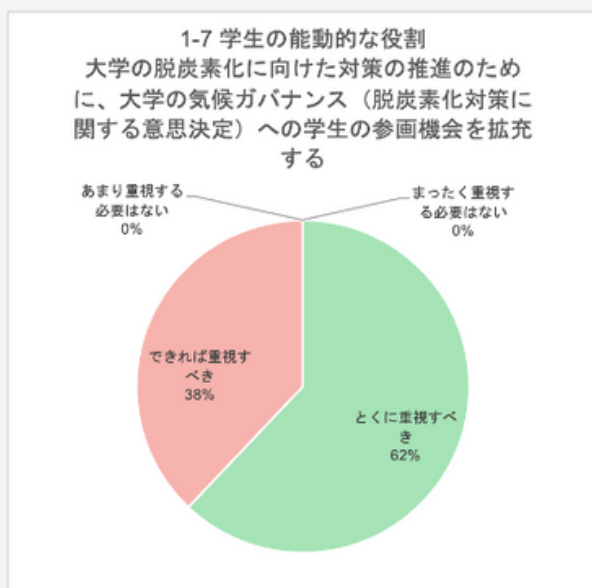
気候会議2日目の最後に、参加学生には15の項目について、どの程度重視するかを尋ねた。また自由記述で、2つの事柄についての問いかけを行った。回答者数29名である。

前回までと同様に、気候会議に参加した学生たちは、一般的には今回の会議参加の経験を大変貴重であったと感じており、今後とも同じような機会を通じて、日頃はあまり顔を合わせることがない他学部の学生や大学院生との意見交換の機会を持つことを待ち望んでいることが判明した。

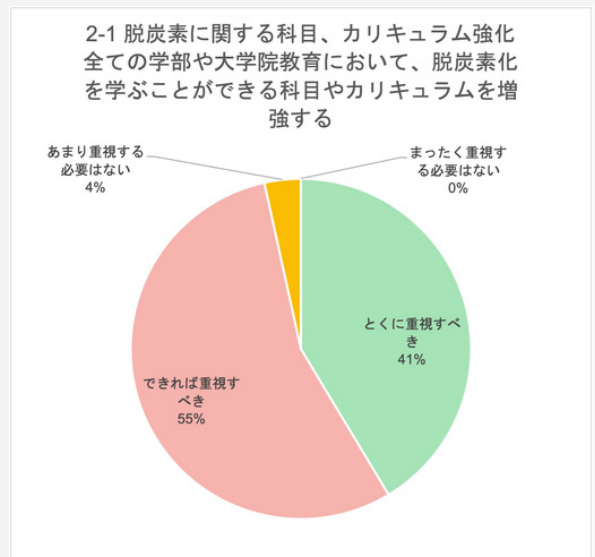
以下に4つの項目についての回答結果を見る。最初の3項目についての学生の回答傾向も、前回までとほぼ同じである。まず、本学では既に全ての電力が再生可能エネルギー由来となっているが、節電に取り組むことは全員が重要であると考えている。



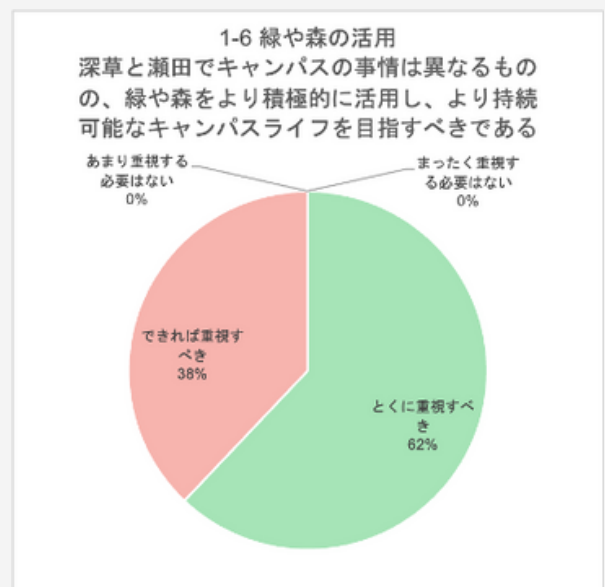
また、大学の脱炭素化対策に関する意思決定への参加においても、全学生が自分たちの参画機会を拡充すべき、と返答した。



そして、学生が学ぶカリキュラムにおいて脱炭素化に関連する事柄を学ぶことについても、非常に多くの割合の学生がより積極的取り組みを望んでいることも判明した。



さらに、今回は深草と瀬田という2つのキャンパスにおいて気候会議を開催したが、いずれのキャンパスにおいても、緑の活用による持続可能なキャンパスライフの追求が大切であると全学生が回答した。



自由記述として、「脱炭素社会への挑戦において、あなたはどのような人材になりたいですか」という項目に対しては、さまざまな回答があった。簡単には要約できないが、あえてまとめると次のようになるのか。

幅広い視野から脱炭素化というテーマについて自分事として興味関心を持ち、主体的に考えつつ、無理なく家族や友人といった周りの人々と共に、無理なく行動していける人になりたい。ここまでは昨年とあまり変わらないが、今回は脱炭素化に関連し一見進展しても、実は見せかけの行動であったり、また逆戻りしている場合もあるので、そのような「ニセの行為」を見抜いたり、くい止めたりできる人材になりたいとの意見も複数あった。

最後に、「龍谷大学の位置する京都や滋賀のカーボン・ニュートラルへの挑戦について、あなたが思うことを自由に記載して下さい」として意見を書いてもらった。これに対してもさまざまな意見があったが、全体としては、今回の会議参加で大学の取り組みを初めて知ったので、これを機会に地域での取り組みにも今後機会をみて参加したいと感じた学生は多い。その上で、大学が宣言しているカーボン・ニュートラルの実現を、もし可能なら目標年の2039年より早めて欲しいとの意見が全員の総意であった。



3 参加学生の状況と学びについて

第4回（2024年度）11月30日（土）瀬田キャンパス、12月14日（土）深草キャンパス

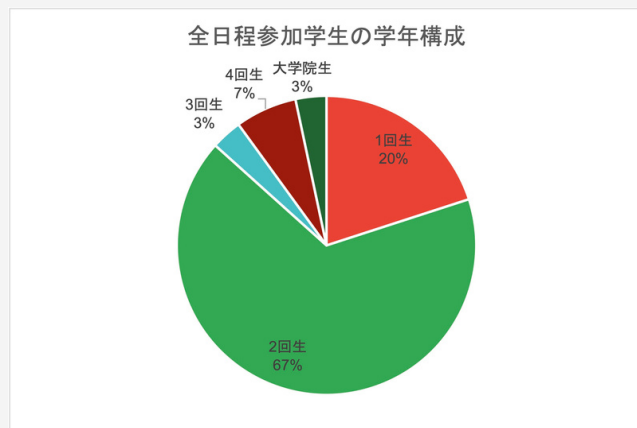
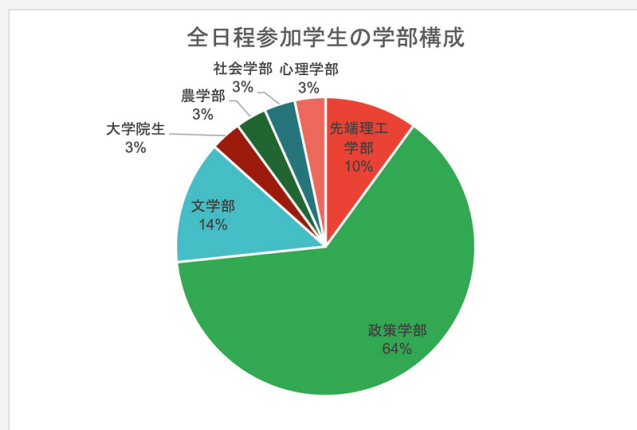
申込者は36名（運営スタッフである学生団体OCs 3名は含まず）で、ポータル・チラシ等がきっかけとなった人が11名、無作為抽出メールがきっかけとなった学生が7名であった。友人・知人よりが2名、教員からの紹介が16名であった。また過去に参加して今回も参加するという学生が2名いた。

参加者の人数と所属学部は以下のとおりである。

参加学生数：31人（1日目）、30人（2日目）、うち全日程参加学生30人

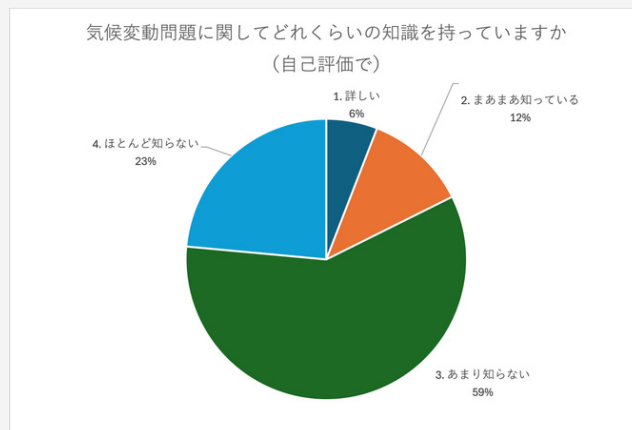
（OCs 3、村田和代ゼミ15）

全日程参加学生の所属学部（人数）：文学部（4）、法学部（0）、社会学部（1）、経済学部（0）、経営学部（0）、国際学部（0）、政策学部（19）、理工学部（3）、農学部（1）
全日程参加学生の学年（人数）：4回生（2）、3回生（1）、2回生（20）、1回生（6）、大学院生（1）



会議前のアンケートより（回答者34名）、気候変動に関して詳しい学生ばかりでないことがわかる。（詳しい2名<6%>まあまあ知っている 4名<12%>、あまり知らない 28名<59%>、ほとんど知らない 8名<23%>）

ほとんど全学部（多様な学部）、全学年から参加し、気候変動に関しての知識量もさまざまであることがわかる。参加理由には、気候変動問題に関心があったから、龍谷大学のサステナビリティに向けた取り組みに関心があったから、といったように気候会議の内容そのものに関心があったという理由から、普段あまり接することのない他学部の学生とコミュニケーションがとれるから、謝礼がもらえるからという理由もあった。気候会議は多様な意見を集約することが主目的であり、この目的にかなった参加者構成であると言える。



会議後のアンケートでは（回答者30名）、『2日間の感想』『特に印象に残った学び』『次年度もしたいか』『会議主催者へのメッセージ』について自由記述とした。

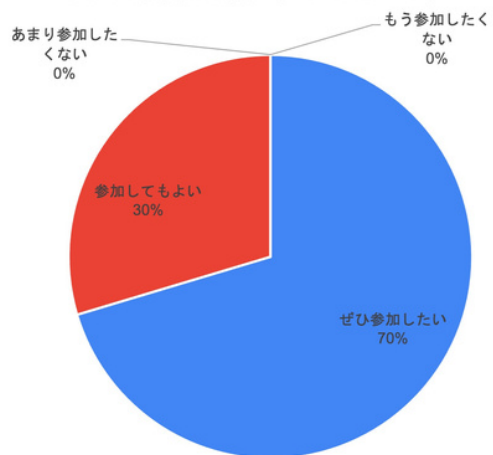
2日間の感想については、「楽しかった」「勉強になった」と全員が肯定的な感想を持っていた。また、学年や学部を越えたひとたちとの「話し合い」「議論」「ディスカッション」「グループワーク」により多様な意見を知ることができたという感想が12名から寄せられた。「堅苦しいと思っていたがざっくばらんに話し合えて楽しかった」という意見もあった。加えて、「自分でも何かできる」「脱炭素の実現は自分に関わる身近な問題である」といった環境問題を「自分事」としてとらえる意見も9名が記載していた。

次年度も学生気候会議が開催されたら、「ぜひ参加したい」「参加してもよい」と全員から参加するという回答を得た。

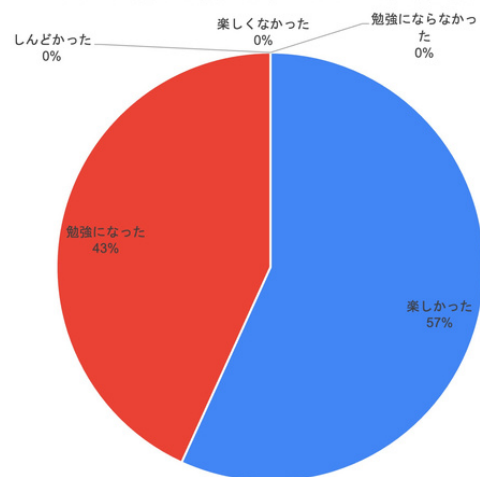
特に印象に残った学びについては、例年あげられる「カードゲーム」「龍谷大学の脱炭素への取り組み」「対話や話し合いの重要性」に加えて、今年度は多くの学生から「龍谷の森フィールドワーク」があげられており、今回初めて瀬田キャンパスで実施したことをプラスにとらえていることがわかる。

今年度も多様な学生の参加で、参加した学生にとっては、環境への意識づけや、自主性の涵養へとつながったことがわかる。一方で、参加学生を集めることが年々困難になっており、今年度は主催者側の教員のゼミ生（15名）に参加をお願いした。教員が主体となって学生を集めることには限界がある。来年度は、OCsや今年度の参加学生が中心となって、参加学生を集めていただくことが必要であろう。

(4) 次年度も会議に参加したいですか？



(1) 2日間の会議はどうでしたか（複数回答）



4 総括

2024年の学生気候会議は1日目を瀬田学舎にて開催した。気候会議始まって以来の瀬田学舎開催であった。他のキャンパスで学ぶ学生たちにとっては、ほとんど訪れることがない瀬田学舎において、龍谷の森を短い時間であっても体験したことは有意義であった。異なったキャンパスで学ぶ学生たちが相互に交流し、キャンパスごとの特徴を尊重しつつも、京都や滋賀というそれぞれの地域での関わり方の模索を続けることは意義深い。インターネットの普及によってコミュニケーションが希薄化していると学生たち自身も感じている状況において、対面で濃密な対話を実施する学生気候会議は、参加者にとって貴重な気づきの場となっている。そのため今後も熟議の場としての気候会議の開催を継続することは、龍谷大学生としてのアイデンティティ形成にも資する貢献である。このように学生たち自身が自分の立ち位置を明確に認識してこそ、これまでの学生気候会議で繰り返し強調されてきた、学生たちが地域との関わりの中で学びを深めることの今後のさらなる土台となっていくであろう。

毎年学生気候会議ではこのような新しい取り組みも行ってきたが、その一方でキャンパスライフの脱炭素化という点は、初回から継続して検討してきた。この点では、今回の学生気候会議の開催においても、参加した学生たちの満足度は以前と同様に大変高かった。普段あまり明確に意識しない環境問題について、じっくりと考え、討議することができたからである。さらに、大学のカーボンニュートラル宣言や、大学の複数キャンパスにおけるエネルギー源の脱炭素化の実現（再生可能エネルギー由来の電力利用の実現）について、学生たち自身も肯定的に受け止め、脱炭素化の取り組みにおいて先行している龍谷大学にて学ぶ機会を得たことを誇らしいと感じている。しかしながら、それは裏を返せば、日頃の学びのカリキュラムが、総合的に持続可能性について学べるものになっていないという危惧でもある。この点は参加した学生たちの中でもこれまでもまた今回も繰り返し指摘されてきた。

このような肯定的な動きを今後とも持続するためには、今後の気候会議の開催にはさらなる工夫が必要であろう。まず第1に、学生気候会議の提言の実効性の確保である。これまでも学生気候会議の開催にあたっては、学長や大学執行部から一定の支援を得てきた。しかし、そのような支援は必ずしも制度化されていない。担当者や役職者が交代しても、学生気候会議の開催、会議からの提言書が真摯に聞き入れられる仕組みづくりの確保は依然として重要である。さらに、学生気候会議の開催も今回で4度目となり、2024年に初めて進捗状況を気候会議として確認するという作業を行った。これは気候会議からの提言を「言いつばなし」に終わらせるのではなく、実効性をもったものとするためには極めて重要である。

第2に運営体制の一層の整備である。今回の学生気候会議の開催にあたっては、2023年度に設置されたサステナビリティ推進室の協力を得た。新しい体制での運営・開催は概ね順調であった。瀬田ならびに深草学舎という2つの異なったキャンパスでの開催も、この運営体制によって円滑に行われたと言える。今後、学生気候会議が継続的に開催され、会議からの提言が大学のガバナンスに一層根付いていくためには、脱炭素化の現状のモニタリングや、各教学主体や一人一人の教職員の教育・研究活動との連携が一層図られることが不可欠となる。そのような効果的な仕組みづくりはまだ始まったばかりであり、今後のさらなる進展が望まれる。

このような進展こそが、大学のみでは関係者の行動変容を促すのが難しいがしかし重要なポイントに切り込むことを今後可能にしていくのではあるまいか。例えば大学にある学生食堂でのフードロスの削減や、教職員や学生の交通手段の脱炭素化といった事柄は解決が一筋縄ではいかない。しかしながら、教職員や学生たちにとって学生気候会議や大学のガバナンス改革と連携して、これらに取り組むインセンティブが持てる何らかの仕組みが生じた時には、解決への可能性が見えてくるかもしれない。そのような先に、本学が理念として掲げる仏教SDGsの実現も近づいてくるのであろう。そうやって初めて創立400年の記念の年である2039年までのカーボンニュートラルが実体を伴ったものとなり、本学がまわりからもさらに一層注目される大学となるのではなかろうか。



5 資料編

5-1 プログラム概要

【1日目】

開催地 瀬田キャンパス 6号館
第1グループワーク実習室

- 9:15 オープニング
9:45 アイスブレイクを兼ねたカードゲーム
進行：京都府地球温暖化防止活動推進
センター 副センター長
木原 浩貴 氏
12:00 休憩
12:05 基礎知識提供「気候変動とSDGs・
サステナビリティ」
講義：国際学部 教授 斎藤 文彦 氏
12:30 昼食休憩
13:30 瀬田キャンパス・龍谷の森の紹介
講義：先端理工学部 教授 奥田 哲士 氏
同 准教授 横田 岳人 氏
13:45 龍谷の森、瀬田キャンパス内での
フィールドワーク
案内：横田 岳人 氏
14:45 休憩
14:55 森林のCO2収支について、「龍谷の森」
保全活用事例
1日目の論点提起
講義：奥田 哲士 氏、横田 岳人 氏
15:15 グループワーク 龍谷の森活用をテーマ
にしたワークショップ
16:25 成果発表
16:40 教員からのコメント
16:50 ファシリテーショングラフィック
解説：特定非営利活動法人
グローバル人材開発センター
チーフコーディネーター
外崎 佑実 氏
16:55 次回の説明
17:00 1日目終了

1日目は、多様な学部、学年から集まった32名が参加しました。

冒頭、深尾昌峰副学長からのビデオメッセージでは、気候会議の提言がきっかけとなり実現した取り組みとしてウォーターサーバーやサステナビリティ推進室の設置が挙げられ、学生による大学のサステナビリティをめざす取り組みに積極的な参画に強い期待が示されました。

午前の部では、企業や行政、NPOなど実際の社会のアクターになりきって、それぞれの利益を追求した行動・駆け引き・協調の結果、気候変動が促進されるのか、緩和されるのか、プロセスをシミュレーションで体験できるカードゲームを体験しました（進行：京都府地球温暖化防止活動推進センター副センター長）。白熱したやり取りのなかで参加者の緊張も解け、これから2日間ともに参加する一体感が生まれました。

続いて、国際学部の斎藤文彦教授から、気候変動の進行状況を踏まえサステナビリティ、SDGsの観点から私たちがめざし、すすむべき方向性が提示されました。

午後の部では、先端理工学部の横田岳人准教授から、瀬田キャンパスの立地する歴史的背景、地域における瀬田キャンパスの存在意義、環境省の自然共生サイトに登録された「龍谷の森」の生物多様性の回復・創出の観点から見た役割などについて講義を受け、森へのフィールドワークへ出かけました。

瀬田キャンパスの中には、かつて地域の人々が生活用具や堆肥として自然を活用していた里山が残っています。また滋賀県産材を使って作られた「Green Deck」もあります。この日は龍谷の森の入口までしか行けませんでした。それでも保全と活用の両立の必要とその難しさなど、自然の有り様からたくさんのことを学ぶことができました。

フィールドワークを受けて、横田准教授から森林のCO2収支に関する講義を受けました。これまでの先端理工学部の研究により龍谷の森はCO2を吸収できていないことが明らかになっています。CO2吸収効果を高めるには高木を伐採する必要があるが、生物多様性を高めるには低木の手入れが重要となります。目的を明確にしたうえで、どのような管理方法が適切なかが問われます。

次に先端理工学部の奥田哲士教授から、このあと始まるグループワークの論点提起として生態系サービスやサーキュラー・エコノミーの観点から龍谷の森の価値を捉える視点が提案されました。

【2日目】

開催地 深草キャンパス 22号館303教室

- 9:30 オープニング（開会挨拶・講師紹介・主旨/
グランドルール説明・ファシリテーション/
ラフィック説明）
全体進行：政策学部 教授 村田 和代 氏
- 9:35 宿題の共有
- 10:05 龍谷大学「ゼロカーボンユニバーシティ
に向けた取り組み」
及び関連する国の環境政策
講義：サステナビリティ推進室
村井 啓朗 氏
- 10:30 テーマ1に関する論点提起
講義：NPO法人気候ネットワーク
上席研究員 豊田 陽介 氏
- 10:40 テーマ1 グループワーク
- 11:50 成果発表
- 12:05 テーマ1に関する教員コメント
- 12:15 昼食休憩
- 13:10 過去の気候会議による提言内容の進捗
状況報告
講義：政策学部4回生・OCs代表
中西 航 氏
- 13:35 テーマ2に関する論点提起
講義：豊田 陽介 氏
- 13:45 テーマ2 グループワーク
- 14:55 成果発表
- 15:15 グループワーク及び全体に関する
教員コメント
- 15:25 参加者の意見集約
- 15:45 チェックアウト
- 16:05 クロージング（修了式・学長からのコメ
ント・事後アンケート記入）

2日目は深草キャンパスで開催されました。まずグループファシリテーターと参加者がまとめてきたメモをもとに、班ごとに前回1日目のグループワークの結果を振り返り、全体の共有しました。

午前中、環境省から龍谷大学サステナビリティ推進室に出向している村田啓朗氏から大学のサステナビリティに関する取り組み（龍谷の森の活用、ゼロカーボンユニバーシティの取り組みなど）内容の紹介がありました。大学のエネルギー消費量やCO2排出量は大きく減少傾向にあります。また2023年には3キャンパスでの使用電力の100%再エネ化を実現したほか、「深草を森にする」をコンセプトに既存施設の改修、新棟の建設が進められています。さらに龍谷大学と協力協定を締結している環境省の脱炭素を目指した政策についても説明がありました。

次に、NPO法人気候ネットワークの豊田陽介氏から、次のグループワークにつながる論点提起がありました。龍谷大学全体で年間1.3万tのCO2排出（3,333世帯分）していること、再エネの取り組みを始めて排出量が減少傾向にあること、課題として大規模施設整備によるエネルギー消費量増加、天然ガス利用によるCO2排出をどう考えるか、大学のエネルギー消費量の公開や共有の状況などが挙げられました。「深草の森」を通じた生物多様性、ウェル・ビーイングへの貢献やキャンパス内の生物生息状況の把握、KESエコロジカルネットワークへの参加など、大学内だけでなく、社会とのつながりのなかで何をどう変えていくべきかを考えてほしい、とのメッセージがありました。

以上のインプットを受けてグループでの検討に入りました。会場の隣の教室には2025年度以降完成する新棟や改修された既存校舎の建築パースが展示され、学生のイメージも具体化されました。

午後は先端理工学部の奥田教授から「学生が作る環境報告書2024」について紹介がありました。この報告書の作成活動はプロジェクトリサーチに位置づけられ、できるだけ学生の主体性を尊重しつつ日頃の学びで得たインプットをアウトプットする機会とされています。

引き続き、OCs代表の中西航氏から、過去にまとめた学生気候会議の提言書に記載した提言が、大学によってどれくらい達成されたかについてチェックした結果が報告されました。

実現完了したものとしては、再エネ100%の実現、ソーラーパークの増設、ウォーターサーバーの設置、学部横断でSDGsについて学ぶ仏教SDGs概論の開設などがありました。

取組中のものとしては、瀬田キャンパスのソーラーシェアリング、電動アシスト付きシェアバイク、古着の回収、地域連携としてのフィールドワーク等の講座の実施がありました。

一方進捗のないものとしては、モニターの消灯、和顔館のグリーンカーテン、スクールバスの効率的運用、廃棄物処理方法の明示やカトラリーの有料化、コピーミスの回収、環境学習の必修化などがありました。

考察として、再エネの活用、建物のエネルギー効率化、ウォーターサーバーの設置、古着の回収は比較的進んでいるが、別会社に委託している食部門での取り組みが弱いこと、環境教育が必修化できていないこと、地域連携をさらにすすめることについて問題提起がなされました。

以上の講義を受けて、豊田先生からグループワーク2に関する論点提起がなされました。学生参加で進める大学の施設の省エネや断熱性能や、移動手段を自動車以外にどう変えていくか、地域で実施されているプロジェクトへの参加やNGO等とつながっていくことも大切であるとのサジェスションがありました。

5-2 運営体制

龍谷大学LORC、学生団体OCs、サステナビリティ推進室で実行委員会を組織し、企画から運営まで担った。サステナビリティ推進室の参画は今年度が初めてであった。

実行委員会メンバー

政策学部 教授 的場 信敬

// 教授 村田 和代

国際学部 教授 斎藤 文彦

先端理工学部 教授 奥田 哲士

// 准教授 横田 岳人

サステナビリティ推進室

OCs

会議当日はOCsから3名のほか、実行委員を務める教員のゼミ生がグループのファシリテーターとして参加し、グループディスカッションの円滑化、活発化に大きな役割を果たした。

また、学生ファシリテーターとしての姿勢・スキルを身につけるため、事前にファシリテーション研修を開催し、受講したメンバーのみ気候会議のファシリテーターを務めた。

ファシリテーション研修

日時：11月22日（金）4～5限

場所：深草キャンパス21号館407

講師：

合同会社カーニバルライフ

副代表 山本 恵果さん

進行：村田和代（政策学部教授）

受講学生数：16名（村田ゼミ生）

《ファシリテーション研修プログラム》

15:15 イントロダクション 気候会議についての紹介

15:45 話し合いの実施と観察

テーマ：外国人観光客のための京都観光ツアー

京都のエコツアーをプランする

16:45 実施者、観察者が用紙記入、観察者は時間軸の用紙に付箋を貼る

17:15 振り返り

17:45 「ファシリテーションにとって大切なこと」をグループで検討

18:00 講義

18:25 終了

《学生募集方法》

①全キャンパスでのポスター掲示

②ちらしの配布

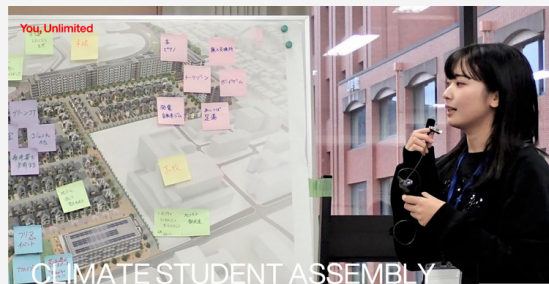
5000枚印刷し、全教員の個人ポストへの投函、教員を通じた授業等での配布を行った。

③学内ポータルサイト掲示板への掲載

④大学ニュースセンターへの掲載

⑤メールでの募集案内送信

全学部学生20720人（入学年度2021～2024年度）の3割にあたる6198人を無作為抽出し、学籍番号をもとに作成したメールアドレスへ斉配信を行った（送信日：8/7～8/8、10/30の2回）。



CLIMATE STUDENT ASSEMBLY
at RYUKOKU UNIVERSITY

第4回 龍谷大学学生気候会議

気候危機に立ち向かうパイオニアを募集

「この夏はとても暑いな」とか、最近「異常気象続きだな」とか感じている方も多いでしょう。これからの暮らしが気になる方、ぜひ一緒に地球の未来や私たちの将来について話しましょう。龍谷大学は、創立400年を迎える2039年にカーボンニュートラルをめざし、日本の大学で唯一《学生気候会議》を開催しています。関心のある方ならどなたでも参加できます。

日程・場所	募集人数
11月30日（土）瀬田キャンパス	30～40名
12月14日（土）深草キャンパス	※2日間参加できることが条件です

当日の内容
地域や大学の脱炭素化に向け、「食」「学び」「消費とゴミ」「移動」などをキーワードにみんなで議論し、成果を提案にまとめます。

主催：龍谷大学学生気候会議実行委員会 共催：龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター(LORC)、サステナビリティ推進室
運営協力：龍谷大学学生気候会議OCs

問い合わせ先：龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター(LORC) lorc@ad.ryukoku.ac.jp



5-3 ファシリテーション・グラフィック成果物

下記QRコードから閲覧できます。



5-4 メディア掲載一覧

- ・「しんぶん赤旗」2025.1.1付
- ・龍谷大学ウェブサイト「ニュースセンター」への掲載
 1. 第4回龍谷大学学生気候会議2024（瀬田）を開催【サステナビリティ推進室、LORC】
<https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-15825.html>
 2. 第4回龍谷大学学生気候会議2024を開催【サステナビリティ推進室、LORC】
<https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-15912.html>

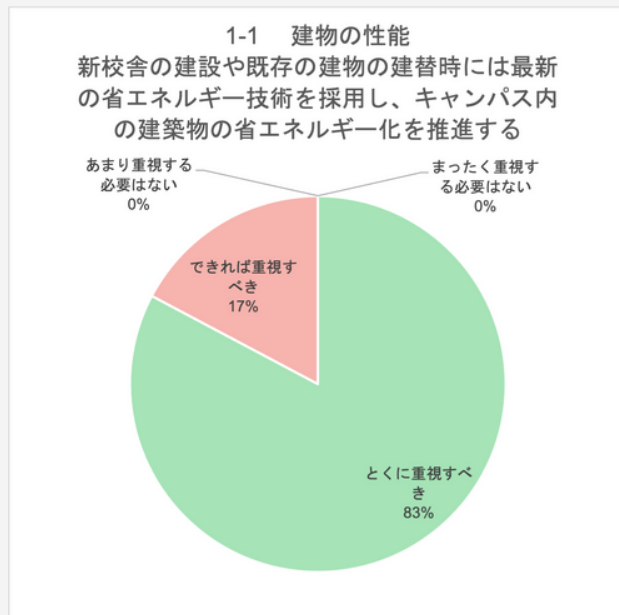
5-5 「学生気候会議 意見集約」と回答結果

※各項目の選択肢は全て、「とくに重視すべき」、「できれば重視すべき」、「あまり重視する必要はない」、「まったく重視する必要はない」の4択とした。

1 龍谷大学内の取り組み

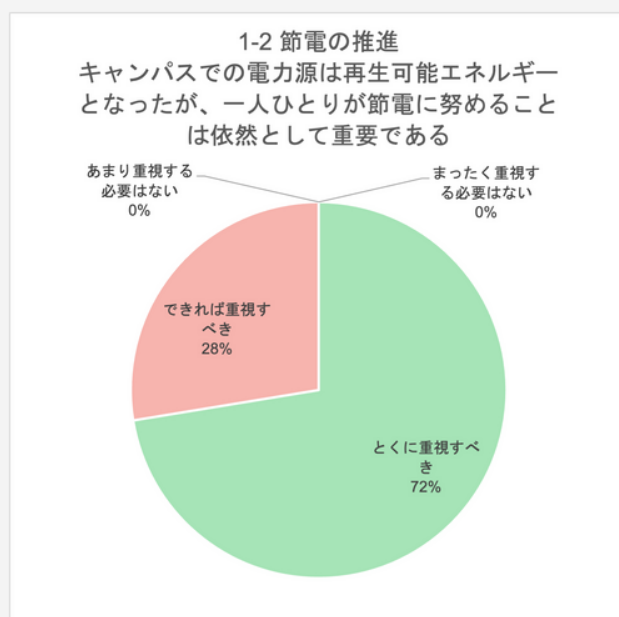
1-1 建物の性能

新校舎の建設や既存の建物の建替時には最新の省エネルギー技術を採用し、キャンパス内の建築物の省エネルギー化を推進する



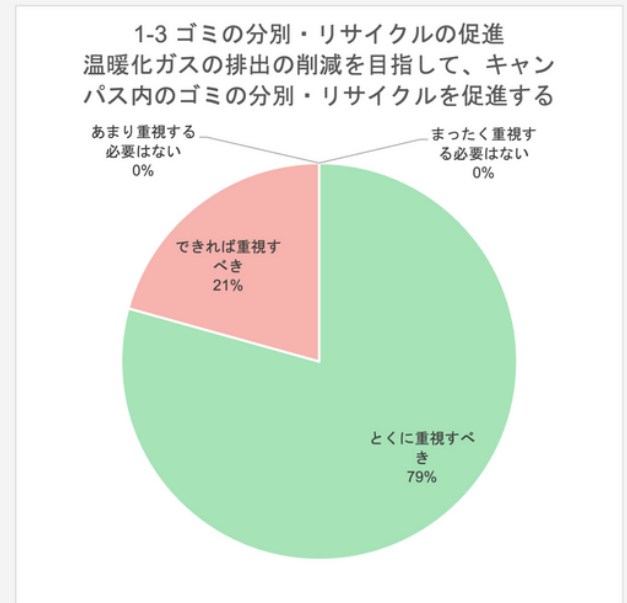
1-2 節電の推進

キャンパスでの電力源は再生可能エネルギーとなったが、一人ひとりが節電に努めることは依然として重要である



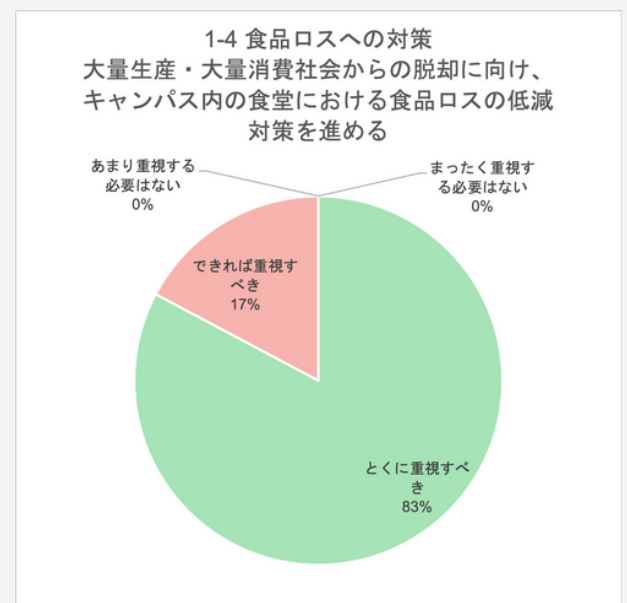
1-3 ゴミの分別・リサイクルの促進

温暖化ガスの排出の削減を目指して、キャンパス内のゴミの分別・リサイクルを促進する



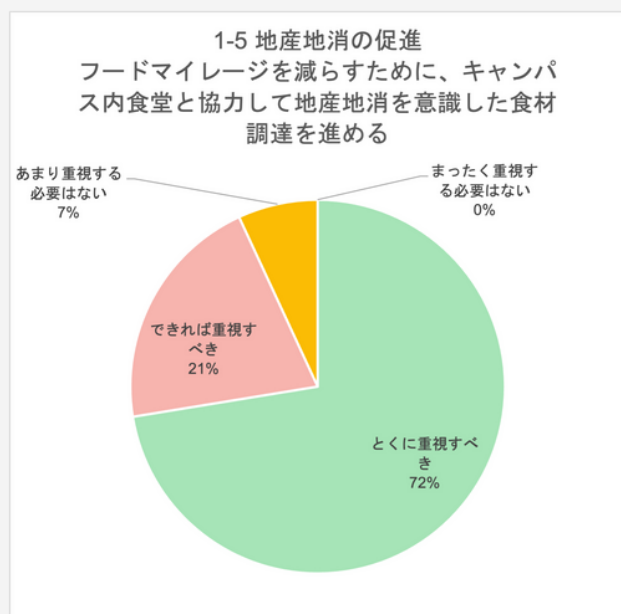
1-4 食品ロスへの対策

大量生産・大量消費社会からの脱却に向け、キャンパス内の食堂における食品ロスの低減対策を進める



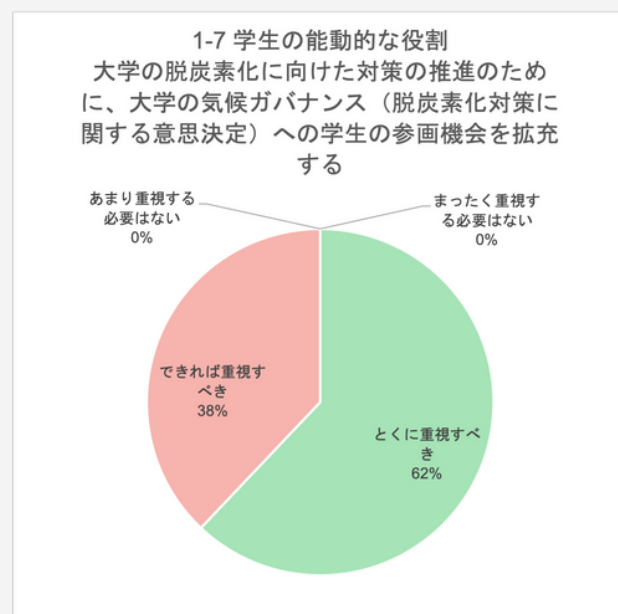
1-5 地産地消の促進

フードマイレージを減らすために、キャンパス内食堂と協力して地産地消を意識した食材調達を進める



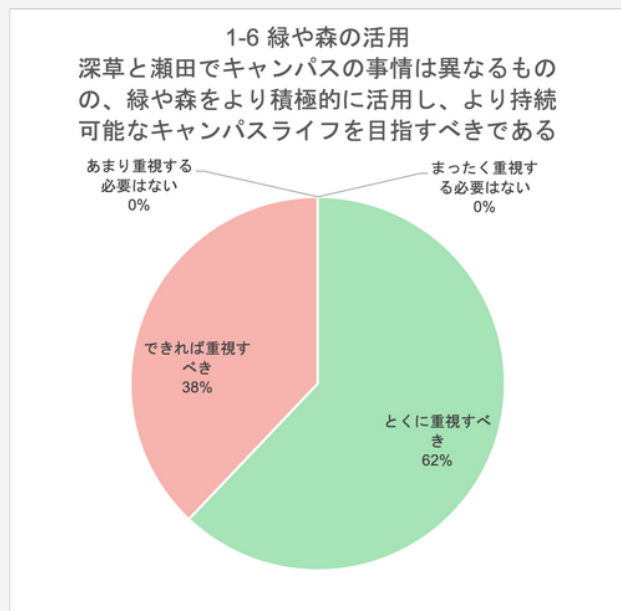
1-7 学生の能動的な役割

大学の脱炭素化に向けた対策の推進のために、大学の気候ガバナンス（脱炭素化対策に関する意思決定）への学生の参画機会を拡充する



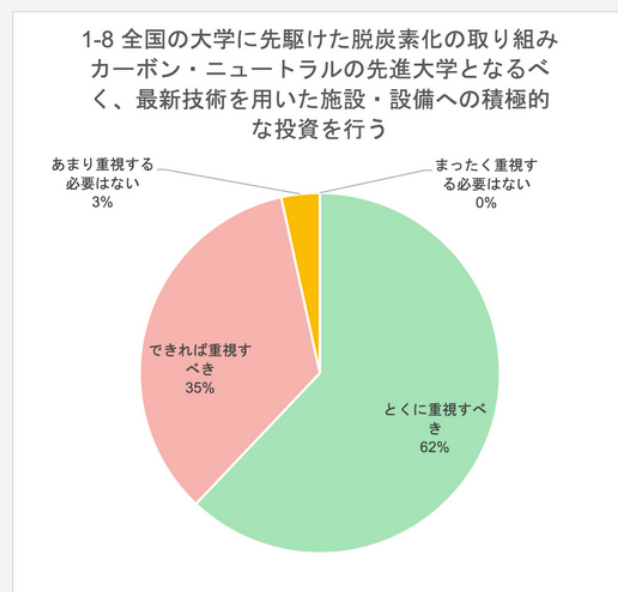
1-6 緑や森の活用

深草と瀬田でキャンパスの事情は異なるものの、緑や森をより積極的に活用し、より持続可能なキャンパスライフを目指すべきである



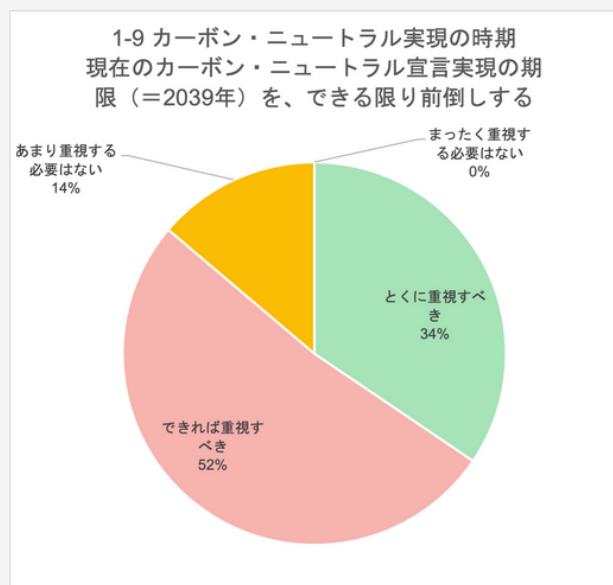
1-8 全国の大学に先駆けた脱炭素化の取り組み

カーボン・ニュートラルの先進大学となるべく、最新技術を用いた施設・設備への積極的な投資を行う



1-9 カーボン・ニュートラル実現の時期

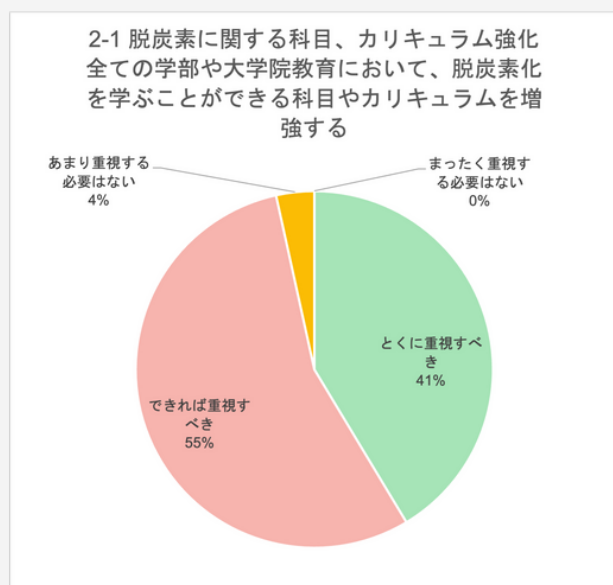
現在のカーボン・ニュートラル宣言実現の期限（＝2039年）を、できる限り前倒しする



2 人材育成と人材像

2-1 脱炭素に関する科目、カリキュラム強化

全ての学部や大学院教育において、脱炭素化を学ぶことができる科目やカリキュラムを増強する



2-2 【自由記述】

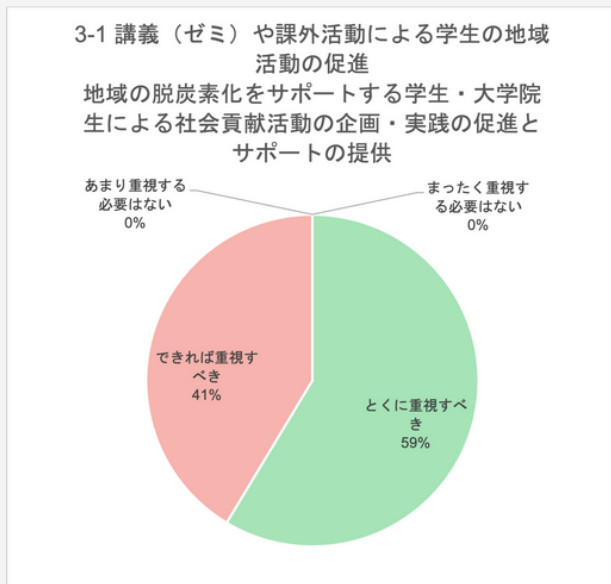
脱炭素社会への挑戦において、あなたはどのような人材になりたいですか

- ・ 脱炭素社会に貢献できる人材でありたい。また、アイデアを出せる人材でありたい。
- ・ 個人レベルのみならず、国や世界レベルの政策まで幅広く関心を持ち、また活動を広げ、より良い社会を作っていくきたい。
- ・ 自分をもてる人
- ・ 私は、ユニークな脱炭素社会への挑戦ができる取り組みにしたいです。

- ・ 興味を持ってもらえるWSなどを開催したい。
- ・ 自家乗用車の工夫や、1人で意識できる身近なことを実行できる人材
- ・ 誰かがやってくれるという意識ではなく、現在の環境について周りに広めていける人材になりたいと考える。
- ・ 社会科学的視点だけでなく、人をどう動かすか、何故動かないのかなどを考える人文科学的視点をもち問題解決に挑みたい
- ・ 脱炭素化に向けて前向きに動けるような人材になりたいと思う。
- ・ その地域や特徴に応じた対策を提案できるような幅広い知識を持った人材
- ・ 脱炭素社会を実行していく人になりたい
- ・ 推進員
- ・ 社会問題を自分事として考え、日常に落とし込める人材
- ・ フードロス無くす先駆けになりたい。
- ・ 脱炭素への取り組みに積極的に参加していきたい。それにより、脱炭素への知見を深めてそれを広げていきたい。
- ・ 今日学んだことや話し合ったことを踏まえて1人でやっても変わらないと思うんじゃなく自分の行動が世の中を変えるための一部だと自負して行動できる人間になりたいと思った。
- ・ 誰からも求められる人材
- ・ やるべきことを人に伝えられる側
- ・ 個人規模でできる省エネ活動ができる人材。
- ・ 諸取組に対して正しい知識を獲得出来る人材
- ・ 吸収できる知識は習得し、周囲の人にも脱炭素化に興味を持ってもらえるように話をしたい。
- ・ カーボンニュートラルが後退する事がないように注視し、後退する事があれば反対の声をきちんと挙げられる人材
- ・ 絶極的に節電などの行動をし、周りがその行動を真似して広がっていくような人材
- ・ 一個人レベルでも協力できるよう、知識をつけたり実際に行動したりできる人材になりたいです。
- ・ 脱炭素化を学ぶことができる授業を積極的に受講し、学んだことをまずは友達や家族に伝える。そして普段の生活で脱炭素化社会に向けた取り組みを周りを巻き込みながら行い、その効果を可視化する。可視化したものを地域の人が集まるWSを開催することにより、地域の人にも広めていきたいと思う。
- ・ 二酸化炭素の排出を抑え生態系にも配慮ができる人材になりたい。
- ・ 実現可能性が高いアイデア政策提案を作れる人になりたい。
- ・ 新技術やアイデアを、実用するためのハードルを下げる人。脱炭素への取組がグリーンウォッシュになってしまふことを防ぐ人。
- ・ 塵を積もらせ山とするために、まず日常的なところからカーボンニュートラルについて考え行動し始める一人になりたい。
- ・ アイディアをとりあえずたくさん発信して、より多くの人のアンテナにひかかり、関心が向くようにしたい。

3 世界・地域のなかの龍谷大学としての役割

3-1 講義（ゼミ）や課外活動による学生の地域活動の促進
地域の脱炭素化をサポートする学生・大学院生による社会貢献活動の企画・実践の促進とサポートの提供

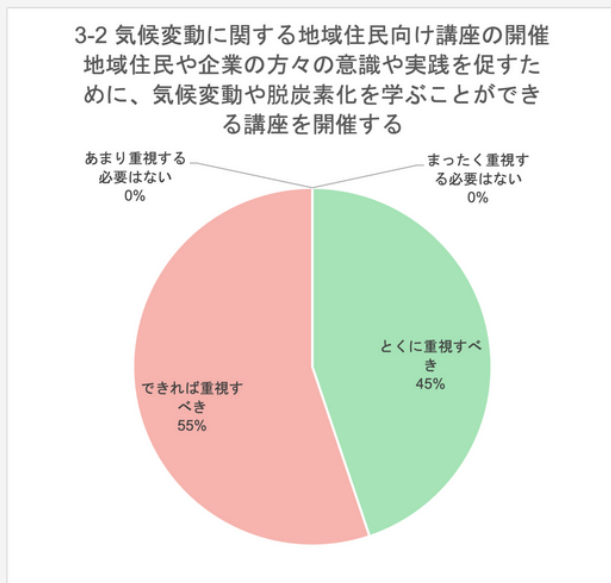


3-3 原発エネルギーの活用

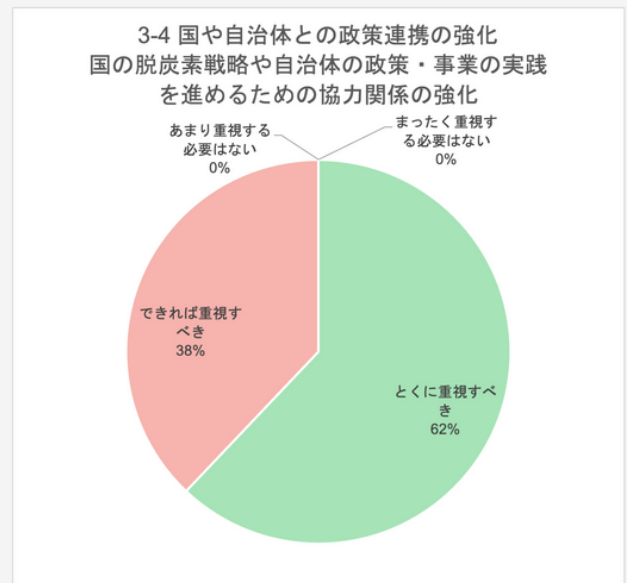
温暖化ガスの排出を出来るだけ削減するために、原子力発電由来の電力を使用する（外部から購入する）



3-2 気候変動に関する地域住民向け講座の開催
地域住民や企業の方々の意識や実践を促すために、気候変動や脱炭素化を学ぶことができる講座を開催する

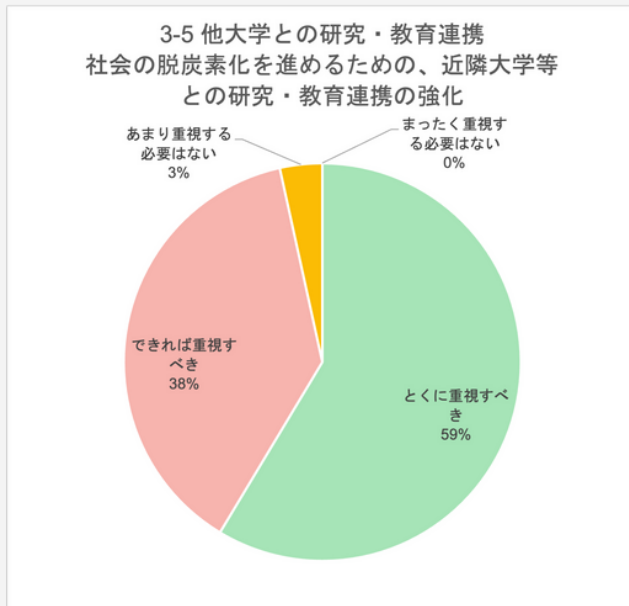


3-4 国や自治体との政策連携の強化
国の脱炭素戦略や自治体の政策・事業の実践を進めるための協力関係の強化



3-5 他大学との研究・教育連携

社会の脱炭素化を進めるための、近隣大学等との研究・教育連携の強化



3-6 京都や滋賀の脱炭素化

龍谷大学の位置する京都や滋賀のカーボン・ニュートラルへの挑戦について、あなたが思うことを自由に記載して下さい。

- 最初は小さな規模でも協力し合って、大きな規模でカーボンニュートラルに取り組めていければいいと思う。
- 一自治体として、脱炭素先行地域出歩かないかにかかわらず、取り組みを行うことは市民の生活を守ることでもあるため重要である。
- 実際私も知らなかったけどカーボンニュートラルの取り組みを実際発信されていてもそもそも知らない人がいると思うのでそれをどうにかしてみんなに理解してもらえたらいいと思った。
- カーボン・ニュートラルへの挑戦として、人が繋がって解決する取り組みを考えなければいけないと考えます。人はあくまで点と点の繋がりのため、その繋がりをどのようにして強く結んで、カーボン・ニュートラルを目指すかが鍵になると思います。
- 様々なやり方があるが、緑化を意識した方法を採用していけば良いと思う。
- 龍谷大学がカーボンニュートラルに取り組んでいることは素晴らしいことだと思うが、今回の気候会議で講義内容にカーボンニュートラルの内容をさらに取り入れるべきという意見を反映させたらよりよい挑戦になると考える。
- 本日のグループワークにて、カーボンニュートラルを目指しているものの、大学内の発電だけでは賄うことは出来ていないことを知った。そのため、本当の意味で脱炭素化を目指すのであれば現在とは違う改革をしなければならないと考えた。
- 滋賀の奥の極相に至った森林を適度に伐採し、里山化して木材を有効活用する。

- バイオ燃料として利用するなど出来ることは沢山ある。
- カーボン・ニュートラルを目指すことにより大学生だけでなく地域の人達も快適に暮らすことができると感じた。
- この挑戦が地域全体に広がって最終的には日本、はたまた世界へとカーボンニュートラルの意識が広がったらいいいと思います。
- 京都や滋賀がどんなことしてるのかよく分かっていないです。
- もっとスピードアップしてほしい。
- 大学が動き出すことで、自治体が流れに乗りやすい雰囲気を作ることに繋がると思う。
- この会議に参加するまでは、カーボンニュートラルにおいて龍大がどのようなことをしているかは知らなかったが、この会議に参加して改めて龍大がしていることが分かって、すごい！！と思いました。カーボンニュートラルの挑戦についてはもちろん応援しているし、自分もその一員になりたいと思いました。
- 龍谷大学がどれだけカーボンニュートラルに真剣に取り組んでいるのか知れた。それはとてもいい事だし他らしいとも感じた。
- 滋賀の瀬田キャンパスはもちろん深草でも今建設されている建物の模型で緑が今よりも確実に多くあったからそもそもの排出量を抑えるのはもちろん吸収の部分も特に大事にすべきだと思った。
- 今後とも続けていくのが良いと思う。
- 京都が学生の街と言われているので、もっと学生を巻き込んだ挑戦があるといいなと思った。
- 学生気候会議の提言書で実際にできたウォーターサーバーなどを通じて、環境のことを考える人がもっと増えれば今よりよりよい未来になると思いました。
- 自分から調べないと出てこないことが多いと感じた。
- 大学がカーボンニュートラルに率先して取り組むことで、脱炭素化に向けたモデルケースができるので積極的にやっていくべきだと思う。取り組んでいることをもっと学内外に発信していくことが必要だと思う。
- これからも少子高齢化が加速し、財政が逼迫することが予想される中、カーボン・ニュートラルを今から順調に進むと予想し計画しているのは甘いのではないかと考える。可能な限り早急にカーボン・ニュートラル実現すべきではないだろうか。
- 特にたんたんエナジーがすごいと思った。丹後・丹波地域から始めて南丹などの地域に広がっていているのが面白いと思った。
- 普段生活していて気にならないことや想像つかない素晴らしいことに取り組んでいるからこそ、一般の地域の方や学生たちが知れる機会が少ないことが少し惜しいと思いました。
- 設備がカーボン・ニュートラルに向けたものになっていることを知らない学生も多いと思うので、まずは知ってもらうことが大切だと思う。また、カーボン・ニュートラルについて学ぶ機会があっても、その学びを活かさなければ脱炭素化に向けた取り組みが進まないため、活かす方法についてこれから検討していく必要がある。
- 今回の話し合いを通して一度、龍谷大学の学生全員の意見を出す機会を作ることにより良いカーボンニュートラルへの挑戦につながると思いました。

- 琵琶湖の近く、豊かな自然の中にいる龍谷大学は、自然との共生を重視は大切です。
- 今回の学生気候会議で、学部の多様さがアイデアに繋がることを強く感じたので、他大学や異なる組織との交流ができるならば新たな取組に繋がると思います。外部ともこのような気候会議ができたと思います。
- 京都は大学も多いので、龍谷大学だけでなく、龍谷大学が他の大学とも協力し引っ張って、京都の大学全体でカーボンニュートラルに力を入れられたらいいと思う。